

元結の詩文における水石への志向について

加藤 敏

はじめに

元結（七一〇～七七二）は、『篋中集』の編者として、また新樂府の先驅となった「系樂府」十二首の作者として、そしてとりわけ安史の亂後の社會の状況を反映し、すでに杜甫において高く評價された「春陵行」・「賊退示官吏」の二篇の詩によって知られる詩人である。例えば劉大杰氏が「他的詩頗能反映社會現實、是一個有心作新樂府描寫時事的詩人。」と述べるように、彼に對しては、社會派の詩人としての評價が定着している。

しかし、一方ですでに、歐陽脩の『集古錄』卷七に「元結、好奇之士也。其所居山水、必自名之。」元結は、好奇の士なり。其の居る所の山水は、必ず自ら之に名づく。」と評され、楊慎の『升庵詩話』卷十には「元次山好奇條。文章好奇、自是一病。好奇之過、反不奇矣。」元次山奇條を好む。文章奇を好むは、自らはれ一病なり。奇を好むことの過ぐるは、反りて奇ならず。」と指摘されているように、例えば彼の文學に顯著に現れる影しい怪異な水石等への志向を示す作品や、晩年に作られる多くの記録の類を見ると、元結には單に尙古載道の文學觀を持った詩人としてのみ理解したのでは捉え盡せない一面が

有るようにも思われる。

また李商隱は「容州經略使元結文集後序」で、「見憎於第五琦・元載、故其將兵不得授、作官不至達、母老不得盡其養、母喪不得終其哀、間二十年。其文危苦激切、悲憂酸傷於性命之際。」（第五琦・元載に憎まる、故に其の兵を將ゐるも授を得ず、官と作るも達に至らず、母老ゆるも其の養を盡くすを得ず、母の喪にも其の哀を終ふるを得ず、間二十年なり。其の文は危苦激切にして、性命の際に悲憂酸傷す。）と記し、彼の文學を正に政治社會との對峙において捉え、その様態を「危苦激切」と評している。李商隱の言う「危苦激切」という言葉はどのように理解できるのであろうか。また、このことは元結の文學に見られる奇怪な水石等への志向とどのように關連づけられるのであろうか。

元結は、ことに「春陵行」「賊退示官吏」の二編が書かれた廣徳二年（七六四）以後、著しい水石への愛好を示している。本稿は、元結の文學に見られる怪異な水石等に對する志向の意味を探ることによつて、彼の好奇のありかたを考察し、元結の文學の特色の一端を明らかにすることを試みたものである。

元結の作品の制作年を孫望の『元次山年譜』に従って見てみると、既に言及されているように、彼は「春陵行」「賊退示官吏」の二篇を制作した廣徳二年以後、自然の景物を題材とした詩や記・銘の類を多く作るようになっていく。

この廣徳二年を境にして彼の文學にどのような變化が起こったのかはひとまず措き、先ず自然の景物を對象とした作品を見てみると、「異」・「殊」・「怪」といった語が頻繁に使用されていることがわかる。詩に限っても、一一四首中、「異」が七例、「殊」が九例、「怪」が六例用いられている。

例えば「引東泉作」、

東京人未知	東京	人未だ知らず
在我左山東	我が左山の東に在り	
引之傍山來	之を引きて山に傍ひて來らし	
垂流落庭中	流れを垂らし庭中に落とす	
宿霧含朝光	宿霧 朝光を含み	
掩映如殘缸	掩映して殘缸の如し	
有時散成雨	時有りて散じて雨と成り	
飄灑隨清風	飄灑として清風に隨ふ	
衆源發淵竇	衆源 淵竇に發し	
殊怪皆不同	殊怪 皆同じからず	
此流又高懸	此の流れ又た高く懸り	
澹澹在長空	澹澹として長空に在り	
山林何處無	山林 何れの處にか無からん	

茲地不可逢 茲の地逢ふべからず

吾欲解纓佩 吾纓佩を解きて

便爲泉上翁 便ち泉上の翁と爲らんと欲す

は、永泰元年（七六五）から大曆二年（七六七）にかけて、元結が道州刺史の任にあった頃の作品である。東京は道州府の東側にあった泉で、山の東側に湧出していたことから名付けられたものである。

冒頭の四句では、まず東京と命名された泉流を庭中に引いた行爲が述べられ、次の四句で、庭中に落下する飛泉の様子が描寫される。立ちのぼる水煙は朝日の光を受け、まるで虹のごとき彩りが現れ且つ消え、飛散する水しづきは時に雨のごとく、清らかな風に運ばれていく。さらに次の四句では、「この泉流が發する岩の竇は怪異な形をしており、それぞれがすべて異なる形状である。」と、視點を轉じて水源の様子が述べられる。この作品では泉流の發する岩の竇の様子が「殊怪」という語で捉えられている。元結はこうした東京のたまたましいものにくみぐりあうことはできない。」と贊美を惜しまない。

彼が山水を好んだことは、「君雅好山水、聞有勝絶、未嘗不枉路登覽而銘贊之。（君雅より山水を好み、勝絶有りと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘贊せずんばあらず。）」と、顔真卿の撰した彼の墓碑銘にすでに述べられているところであり、就中泉流や岩石を偏愛し、その奇怪な様を詠じたことは、太田鼎一郎氏の「海陽泉帖考」に詳細に指摘されている。

確かに元結は水石のたまたましいを「異」・「殊」・「怪」・「奇」といった語でとらえることが多い。

● 軒窗幽水石、怪異尤難狀。

軒窗水石幽かにして、怪異尤も狀し難し。(婁湖上亭作)

●尤宜春水滿、水石更殊怪。

尤も春水の滿つるに宜しく、水石更に殊怪なり。

(遊石溪勸學者)

●涪溪之口有異石焉、……

涪溪の口に異石有り、……

(唐順銘、序)

●涪溪東北廿餘丈、得怪石焉。

涪溪の東北廿餘丈、怪石を得たり。

(暗臺銘、序)

●水實殊怪、石又尤異。

水は實に殊怪にして、石も又た尤異なり。

(涪溪銘)

●水抵兩岸、悉皆怪石。

水は兩岸に抵り、悉く皆怪石なり。

(右溪記)

●朝陽水石、可謂幽奇。

朝陽の水石、幽奇と謂ふべし。

(朝陽岩銘)

●爲愛水石奇、不厭湖畔行。

水石の奇を愛するが爲に、湖畔の行を厭はず。

(曲石苑)

このように「異」・「殊」・「怪」・「奇」という語で水石のたたずまいを捉えた表現が、記・銘の類を中心にして多く見られる。

また更に特徴的なのは、元結の作品に「洞」の字が多用されていることである。例えば、

●無爲洞口春水滿、無爲洞傍春雲白。

無爲洞口春水滿ち、無爲洞傍春雲白し。

(無爲洞口作)

●海内厭兵革、騷騒十二年。陽華洞中人、似不知亂焉。……

…… 草堂背巖洞、幾峯軒戸前。

海内兵革に厭き、騷騒たること十二年。陽華洞中の人、亂を

知らざるに似たり。…… 草堂巖洞を背とし、幾峯か軒戸の前

前にあり。(招陶別駕家陽華作)

●岩下洞口、洞中泉垂。

岩下に洞口あり、洞中に泉垂る。

(朝陽岩銘、序)

●青莎白沙、洞穴丹崖。

青莎白沙、洞穴丹崖。

(九疑圖記)

●岩高氣清、洞深泉寒。

岩高く氣清く、洞深く泉寒し。

(陽華岩銘)

●泉源在庭戸、洞壑當門前。

泉源在庭戸に在り、洞壑門前に當たる。

(賦退示官吏)

などが擧げられる。さらに彼は岩穴にも注目しており、先にあげた「引東泉作」以外にも、

●石皆有竇、竇中湧泉。…… 石尾有穴。

石皆竇有り、竇中に泉湧く。…… 石尾に穴有り。

(五如石銘、序)

●道州東郭有泉七穴、或吐於淵竇。……

道州の東郭に泉七穴有り、或は淵竇より吐し、……

(七泉銘、序)

●谷中有泉、或激或懸、爲竇爲淵。

谷中に泉有り、或は激しく或は懸り、竇を爲し淵を爲す。

(退谷銘、序)

等の例が見られる。元結は水石の奇怪な形状のなかでも、特に穴や洞に對して視線を注いでいたことが窺われる。

また、例えば「苾苾銘」に「片石何狀、如獸之陵。其背巖窟、……」とあ

り、「杯樽銘」に「如罈而底、似傾幾欹。非曲非方、……(寶の如くにして底あり、傾くに似て幾ど欹つ。曲に非ず方に非ず、……)」とあることからすると、彼は凹形の岩石についても注目していたと思われる。このように元結は水石の奇怪な形状に對して強い愛着を抱いており、就中、洞や穴或いは窪んだ形の岩石に着目して詩文を制作しているのであるが、彼の水石に對する態度には更にまた別の特色が見られる。

涪溪在湘水之南、北匯于湖。愛其勝異、遂家溪畔。溪、世無名稱者也。爲自愛之、故命曰涪溪、銘于溪口。銘曰、

(涪溪は湘水の南に在り、北のかに湖に匯る。其の勝異を愛して、遂に溪畔に家す。溪は、世に名稱無き者なり。自ら之を愛づるが爲に、故に命づけて涪溪と曰ひ、溪口に銘す。銘に曰はく、)

……

溪は古より地荒れ

蕪沒已久

蕪沒すること曰に久し

命曰涪溪

命づけて涪溪と曰ひ

旌吾獨有

吾獨り有するを旌す

人誰遊之

人誰か之に遊ばん

銘在溪口

銘して溪口に在り

(涪溪銘)

この銘において、元結は、「命曰涪溪、旌吾獨有」と、溪が自分だけのものであることを明言している。また、涪溪に建てた亭の銘である「唐頤銘」の序においても「命曰唐頤、旌獨有也。(命づけて唐頤と曰ひ、獨り有するを旌するなり。)」と、この建物が自分だけのものであることを述べている。その他、彼には「晤臺銘」があるが、宋、葛立方の『韻語陽秋』(卷十三)に「元次山結屋涪溪之上、有三吾焉。

因水而吾之、則曰涪溪、因屋而吾之、則曰唐亭、因石而吾之、則曰晤臺。(元次山屋を涪溪の上に結ぶに、三吾有り。水に因りて之を吾とすれば、則ち涪溪と曰ひ、屋に因りて之を吾とすれば、則ち唐亭と曰ひ、石に因りて之を吾とすれば、則ち晤臺と曰ふ。)」と指摘されているように、これら三つの銘においては對象を自らの所有物とする意識が鮮明に表出されている。

また、寶應元年(七六二)、孟士源を退谷に招いた時の作品である

「招孟武昌」には、

……

武昌不干進 武昌は進を干めず

武昌人不厭 武昌は人厭はず

退谷正可遊 退谷 正に遊ぶべく

杯湖任來泛 杯湖 來りて泛ぶに任す

湖上有水鳥 湖上に水鳥有り

見人不飛鳴 人を見るも飛鳴せず

谷中有山獸 谷中に山獸有り

往往隨人行 往往にして人の行くに隨ふ

莫將車馬來 車馬を將て來り

令我鳥獸驚 我が鳥獸をして驚かしむる莫れ

と、退谷の鳥獸が元結自らの所有物であることを述べている。恐らく元結によって命名された退谷もやはり自らのものと意識されていたことであろう。

こうした意識はすでに早い時期に元結のうちにあった。病を得て商餘山に靜養していた三十二、三歳頃の作品である「心規」には、「元子病遊世、歸于商餘山中、以酒自肆、有醉歌。里夫公聞之、醪元子之

酒、請歌之。歌曰、元子樂矣。俾和者曰、何樂亦然。……我曰、我雲我山、我林我泉。……(元子世に遊ぶに病み、商餘山中に歸り、酒を以て自ら肆にし、醉歌有り。里の夫公之を聞き、元子の酒を酹とし、之を歌はんことを請ふ。歌ひて曰はく、元子樂し、と。和する者をして曰はしむ、何の樂しみか亦た然る。……と。我曰はく、我が雲我が山、我が林我が泉、と。……)のように、元結自らの醉歌という設定において、商餘山中の山水のたまたまが自身のものであることを喜びをもって述べている。

元結はこのように怪奇な水石、就中、洞・穴・凹状の岩石と泉流とのたまたまに愛着を抱き、命名という行爲によってそれらを自らのものとして愛惜していたのである。こうした意識は早い時期から元結の志向の中に存在しており、彼の文學の一特色を形成していると言つてよいであらう。

二

これまで述べたように、元結は怪異な形状の水石、就中、洞・穴などの形状に對して愛着を抱き、それらを自らの所有物として愛惜しているのであるが、彼は一體なぜそうした水石を好んだのであらうか。

元結は、例えば「瀧溪銘、序」において、

於戲、古人喜尙君子。不見君子、見如似者、亦稱頌之。瀧溪可謂讓矣。讓、君子之道也。

(於戲、古人は君子を喜尙す。君子を見ざるも、似るが如き者を見れば、亦た之を稱頌す。瀧溪は讓と謂ふべし。讓は、君子の道なり。)

のように、溪谷が「讓」という價值を有し、それは君子の持つ價值

と等しいと述べ、理想的な人格者である君子の資質を溪谷に見出だしていることを明言している。元結が「石と水の中に理想的な爲政者の持つ特性を發見し、そこに自然の持つ價值を認めて詩文を作っている。言いかえれば、自然を借りて、理想的な爲政者像を詩的に表現しているのである。」と市川桃子氏が指摘される所以であり、確かに元結は、水石の中に理想的な爲政者のイメージを見出だしていたと言えるであらう。

しかし元結の水石の銘を見ると、必ずしも價值を見出だすばかりではなく、對象に價值が生じている例もみられる。例えば、「七泉銘」では、その序において、先ず「殊怪相異、不可名狀。此邦豈世無好事者耶。而令自古荒之。乃修其水木、爲休暇之處。每至泉上、便思老焉。(殊怪にして相異なり、名狀すべからず。此の邦に豈に世々好事の者無からんや。而るに古より之を荒れしむ。乃ち其の水木を修めて、休暇の處と爲す。泉上に至る毎に、便ち焉に老いんことを思ふ。)」と、元結を惹きつけてやまない怪異な水石のたまたまが呈示される。その水石は世の中においては評價されること無く見捨てられていたものであった。續いて、「於戲、凡人心若清惠、而必思孝、守方直、終不惑也。故命五泉、其一曰瀧泉、次曰漣泉、次曰滌泉、次曰滌泉、次曰滌泉、次曰滌泉、次曰滌泉、次曰滌泉。而有所感發者矣。留一泉命曰漫泉。蓋欲自旌漫浪、不厭歡醉者也。一泉出山東。故命之曰東泉。引來垂流、更復殊異。各刻銘以記之。(於戲、凡そ人の心若し清惠にして、必ず忠孝、方直を守らば、終に惑はざるなり。故に五泉に命づけ、其の一を瀧泉と曰ひ、次を漣泉と曰ひ、次を滌泉、滌泉、滌泉と曰ふ。之を泉上に銘し、來者をして其の流れに飲漱して、感發する所の者有らしめんと欲す。一泉を留めて命づけ漫泉と曰ふ。蓋し自ら漫浪に

して、歡醉に厭かざる者なるを旌せんと欲するなり。一泉は山東に出づ。故に之に命づけて東泉と曰ふ。引き來り流れを垂らせば、更に復た殊異なり。各々銘を刻して以て之を記す。」と、七泉に命名した所以を述べる。これらの泉流はそれ自體が、例えばその形狀において惠、方、直、忠、孝という價值を有しており、それを元結が見出だしたというのではなく、元結の命名という行爲によって、新たに價值が生じているのである。

また、水石に見出だし或いは生じた價值がすべて理想的爲政者のそれに連なるものではないことは、「七泉銘」に「漫泉」「東泉」が含まれていることから明らかである。

「東泉」は、本稿の冒頭に引用した「引東泉作」に稱えられている泉流であるが、その命名の由來は、山の東側から流れ出ているということである。

「漫泉」の「漫」は、元結が社會に對する自らの態度を述べている言葉で、彼は自らを漫叟と號している。この漫という態度を肯定することを述べた「漫論」では、世俗の規範を維持する規檢大夫・持規の徒との問答を設定し、規檢大夫の「漫不足準、漫不足規、漫無所用、漫無所施。……公髮曰白、無終惑之。」(漫は準とするに足らず、漫は規とするに足らず、漫は用ゐる所無く、漫は施す所無し。……公は髮白に白ければ、終に之に惑ふこと無れ。)という批判に對して、「吾當於漫終身不差。著書作論、當爲漫流。(吾當に漫において終身差ぢざるべし。書を著し論を作るに、當に漫流を爲すべし。)」と、自らが漫をもつてよしとすることを述べている。漫は、ぶらぶらとして何のとりとめもないことであり、これは世俗的な價值觀からは許容されないものである。

元結はこの世俗の價值觀からは許容され得ない「漫」を自らの價值觀として、泉流に「漫泉」と命名し、「旌叟於此、漫歡漫醉。(叟此において、漫歡漫醉するを旌す。)」(漫泉銘)と、自らが世俗的な價值觀を離れて歡醉していることを世俗の人士たちに明らかにしようとしているのである。惠、方、直、忠、孝も君子の資質であるとともに、「漫」と同じく元結自身を支えている價值觀である。先に述べたように、水石は命名されることによって新たな價值が生じている。元結が命名という行爲によって水石に價值を授けていると言うこともできよう。

これらの水石は怪異な形狀をしていた。怪異な水石はその怪異さゆえに、天下の景勝としての價值を知られることなく、世に忘れ去られている。怪異な水石のたたずまいが誰にも賞玩されないということについては、「七泉銘序」の他、「無人修賞、競使蕪穢。(人の修賞する無く、競ひて蕪穢せしむ。)」(朝陽岩銘)、「置州以來、無人賞愛。(州を置きて以來、人の賞愛すること無し。)」(右溪記)などの言及が見られる。怪異さは、世人の賞玩の價值基準には合致しないのであり、怪異な水石は世人においては賞玩の對象とはなりえないものである。

一方元結自身も世俗と合致しない價值觀を持つ、時流とは異なる存在として自らを位置付けていた。例えば商餘山に靜養していた頃に書かれた「心規」には、「子行于世間、目不隨人視、耳不隨人聽、口不隨人語、鼻不隨人氣。其甚也、則須封包裹塞。不爾、有滅身亡家之禍、傷汗毀辱之患生焉。(子世間を行くに、目は人の視るに隨はず、耳は人の聽くに隨はず、口は人の語るに隨はず、鼻は人の氣に隨はず、其の甚しきや、則ち須らく封包裹塞すべし。爾らずんば、滅身亡家の禍、傷汗毀辱の患生ずる有らん。)」と、世俗の價值觀に従つては

ならないことが述べられている。また寶應元年（七六二）の作である「自釋」では、「於戲、吾不從聽於時俗、不鉤加於當世。誰是聳者。吾欲從之。彼聳叟不漸帶乎答響。吾又安能薄乎著作。彼聳叟不羞聳於鄰里。吾又安能漸漫浪於人間。（於戲、吾時俗に従聽せず、當世に鉤加せず。誰か是れ聳なる者ならん。吾之に従はんと欲す。彼の聳叟は答響を帯ぶるを慚ぢず。吾又た安くんぞ能く著作を薄くせんや。彼の聳叟は鄰里に聳駭たるを羞ぢず。吾又た安くんぞ能く人間に漫浪たるを慚ぢんや。）」と、時俗に従わない自らの立場を明言している。先に挙げた「漫論」も、そうした彼の心境をよく物語るものである。

世俗と異なる價值觀を有する故に世に受け入れられない元結の姿は、怪異であるが故に世人から賞玩されない水石のたたずまいと全く重なる。元結はおそらく怪異な水石の中に自らの資性に等しいものを見ていたと思われる。彼が水石に價値を授けたのが、後に述べるように諷諭の意識に基づくことは無論である。しかし、その行爲は彼が怪異な水石の中に自身との同一性を見た時に始めて可能となったのである。

ところで前節で見てきたように、元結は水石の様々な形状のうち、洞や穴、凹状のものに對して殊に強い愛着を抱いているのであるが、彼はこうした形状の水石に對してなぜ殊に強い愛着を抱いているのであろうか。

- 巉巖小山石 巉巖たる小山の石
- 數峯對窻亭 數峯 窻亭に對す
- 窻石堪爲樽 窻石 樽と爲すに堪へたり
- 狀類不可名 狀類は名づくべからず
- 巡回數尺間 數尺の間を巡回すれば

元結の詩文における水石への志向について

如見小蓬瀛	小蓬瀛を見るが如し
樽中酒初漲	樽中に酒初めて漲れば
始有島嶼生	始めて島嶼の生ずる有り
豈無日觀峯	豈に日觀の峯無からんや
直下臨滄溟	直下 滄溟に臨む
愛之不覺醉	之を愛して覺えず酔ひ
醉臥還自醒	酔ひて臥し還た自ら醒む
醒醉在樽畔	醒醉して樽畔に在りて
始爲吾性情	始めて吾が性情を爲す
若以形勝論	若し形勝を以て論ずれば
坐隅臨郡城	坐隅 郡城に臨む
平湖近階砌	平湖 階砌に近く
遠山復青青	遠山 復た青青たり
異木幾十株	異木 幾十株
枝條冒簷楹	枝條 簷楹を冒ふ
盤根滿石上	盤根 石上に滿ち
皆作龍蛇形	皆龍蛇の形を作す
酒堂貯釀器	酒堂 釀器を貯へ
戶牖皆罍斝	戶牖は皆罍斝
此樽可常滿	此の樽常に滿たすべし
誰是陶淵明	誰か是れ陶淵明ならん

(窻樽詩)

この「窻樽詩」は、永泰二年十一月、道州刺史の任にあった時の作品である。窻石と呼ばれる周りが險しく切り立っていて中が凹状になっている名状がたい石があり、その窪みはまるで蓬萊や瀛洲を見る

かのようにであり、そこに酒を満たすと鳥が生じ、大海に臨むようである、と元結は言い、窟石に生じる別乾坤に注目している。この詩と同時期に作られたと思われる「窟樽銘」には、「空而臨之、長岑深壑、廣亭之内、如見山岳。滿而臨之、曲浦回淵、長瓢之下、江湖在焉。(空にして之に臨めば、長岑深壑、廣亭之内、山岳を見るが如し。滿たして之に臨めば、曲浦回淵、長瓢の下、江湖在り。)」と、その世界の有様を表現している。この窟樽は「太樸」「直純」であり、古代の聖王の徳性に等しいという點で高い價値を有しているのであるが、それとともに元結は、この奇怪な形状の岩石に生じる世界に注目し、「之を愛して覺えず醉ふ」と、限らない愛着の思いを吐露している。

また、至徳元載(七五〇)、元結は安史の亂を避けて猗玗洞(湖北省黄石市獅子山の飛雲洞)に住み、自ら猗玗子と號していた。この時期の作品である「虎蛇頌」の序では、

猗玗子逃亂在硯。南人云、猗玗洞中、是王虎之宮。中硯之陰、是均蛇之林。居之三月、始知、王虎如古君子。始知、均蛇如古賢士。然哉、猗玗子奪其宮、王虎去而不回。猗玗子侵其林、均蛇去而不歸。……

(猗玗子亂を逃れて硯に在り。南人云へらく、猗玗洞中は、是れ王虎の宮なり。中硯の陰は、是れ均蛇の林なり、と。居ること三月にして、始めて知る、王虎は古の君子の如きを。始めて知る、均蛇は古の賢士の如きを。然るなるかな、猗玗子其の宮を奪ひ、王虎は去りて回らず。猗玗子其の林を侵し、均蛇は去りて歸らず。……)

というように、洞のうちに王虎の宮、均蛇の林があり、洞全體が一つの世界をなしていることを述べている。「硯」字は、劉法綏氏によ

れば、元結自らが創作した文字であり、四方を取り圍んだ石を屋壁としたものという意味であるという。「古君子」「古賢人」は、ここでは古の有徳者を言うのであろう。猗玗洞は、四方を岩石に取り圍まれた、あたかも古代の有徳者のことき王虎や均蛇の住む世界であり、安史の亂によって騒然とした外界とは隔絶された別乾坤であった。

さらに元結は「招陶別駕家陽華作」においても、「海内厭兵革、騷蹶十二年。陽華洞中人、似不知亂焉。(海内兵革を厭ひ、騷蹶たること十二年。陽華洞中の人、亂を知らざるに似たり。)」と、陽華洞中が外界とは隔絶されていたことを述べている。

このように、元結は、洞穴や凹状の岩石に對して、そこに現出する別乾坤に確かに注目している。その世界は、時には蓬萊や瀛洲であり、洞天であったが、騒々たる世俗の世界から隔絶されているものであった。その中に身を置き、その世界を自分の所有するものと意識することによって、彼の心は安らぎに満たされていたのであろうと思わ

- | | |
|-------|------------|
| 石宮春雲白 | 石宮 春雲白し |
| 白雲宜蒼苔 | 白雲 蒼苔に宜し |
| 拂雲踐石徑 | 雲を拂ひ石徑を踐む |
| 俗士誰能來 | 俗士 誰か能く來らん |
| 石宮夏水寒 | 石宮 夏水寒し |
| 寒水宜高林 | 寒水 高林に宜し |
| 遠風吹蘿蔓 | 遠風 蘿蔓を吹き |
| 野客照清陰 | 野客 清陰を照ぶ |

(石宮四詠 其二)

(石宮四詠 其二)

石宮秋氣清　石宮　秋氣清し
 清氣宜山谷　清氣　山谷に宜し
 落葉逐霜風　落葉　霜風を逐ひ
 幽人愛松竹　幽人　松竹を愛す

〔石宮四詠 其三〕

石宮冬日暖　石宮　冬日暖かなり
 暖日宜溫泉　暖日　溫泉に宜し
 晨光靜水霧　晨光　水霧靜かなり
 逸者猶安眠　逸者　猶ほ安眠す

〔石宮四詠 其四〕

この連作は、聶文郁氏が述べるように、天寶九載（七五〇）から十載（七五三）にかけて、元結が商餘山に靜養していた頃の作品と思われる。「石宮」は、商餘山中の洞窟であり、彼は洞窟を「宮」と表現している。この詩は、その洞窟をとりまく自然の四季を詠じたものである。そこは世俗の人間の訪れることのない「野客」「幽人」「逸者」のみの世界である。元結は、野客、幽人あるいは逸者として清陰を喜び、松竹のたたずまいを愛で、安眠しているのである。

「石宮四詠」はおそらく元結三十三、四歳頃の作品であり、先の「虎蛇頌」は三十八歳の時のものであることからすると、これまで述べてきたような洞や凹状の岩石に對する傾倒は元結の文學の早期から見られるものであると言つてよい。元結の怪奇な水石への愛好の基底には、そこに時俗に對する自らの姿との共通性を認めて共感すると共に、水石が現出する別乾坤への志向が見られる。冒頭に擧げた「引東泉作」は、こうした怪異な形状の水石とともにある喜びをよく物語るものであろう。

元結の詩文における水石への志向について

三

元結の文學における諷諭の問題についてはこれまで様々に指摘されている。ここでは水石の愛好と諷諭の關係について考えてみたい。

彼が諷諭を好んだことは「茅閣記」や「酬孟武昌苦雪」などの作品によく窺われる。

「茅閣記」は、永泰元年（七六五）、友人であった湖南の孟士源が茅閣を作った折に、その記として書かれたものである。

乙巳中、平昌孟公鎮湖南、將二歲矣。以威惠理戎旅、以簡易肅州縣。刑政之下、則無撓人。故居方多閑。時與賓客管欲因高引望、以抒遠懷。偶愛古木數株、垂覆城上。遂作茅閣、蔭其清陰。長風寥寥、入我軒檻、扇和爽氣、滿於閣中。世傳衡陽暑濕鬱蒸、休息於此、何爲不然。今天下之人正苦大熱。誰似茅閣、蔭而麻之。於戲、賢人君子爲蒼生之麻蔭、不如是耶。諸公歌詠、以美之。俾茅閣之什、得系詞於風雅者矣。

〔乙巳中、平昌の孟公湖南に鎮すること、將に二歳ならんとす。威惠を以て戎旅を理め、簡易を以て州縣を肅す。刑政の下、則ち撓人無し。故に居は方に閑多し。時に賓客と管て高きに因りて引望し、以て遠懷を抒せんと欲す。偶々古木數株、城上に垂覆するを愛す。遂に茅閣を作り、其の清陰を蔭ふ。長風寥寥として、我が軒檻に入り、爽氣を扇和し、閣中に滿つ。世に衡陽は暑濕にして鬱蒸たりと傳ふるも、此に休息すれば、何爲れぞ然らざる。今天下の人正に大熱に苦しむ。誰か茅閣の蔭ひて之を麻ふに似ん。於戲、賢人君子蒼生の麻蔭を爲すこと、是くの如くならざらんや。諸公は歌詠して、以て之を美とす。茅閣の什をして、風雅を

系嗣する者たるを得しめん。

記は、まず孟士源の治績を賞賛し、續いて茅閣を作ったことを記す。この茅閣に休息すると、爽やかな風が吹いてきてとても濕熱の地にいるとは思われない、と述べ、茅閣を稱える。さらに、今天下の人は炎熱に苦しんでいるのだが、誰がこの茅閣のように黎民を庇護するであろうか、と茅閣のたたずまいに君子の徳を付與している。ここに言う君子は暗に孟士源を指している。そして茅閣を頌讚する歌を作る。ところが、風雅を繼ぐものであると言う。つまり茅閣が炎熱から人を守るといふことが、君子である孟士源が黎民を庇護することの比興の表現となっており、彼はそこに詩經以來の風雅の傳統の繼承を見出だしている。

また、「酬孟武昌苦雪」は、孟士源が元結に寄せた「元次山居武昌之樊山新春大雪以詩問之」という詩に答えたものである。

積雪閑山路 雪積りて山路閑なり

有人到庭前 人有り庭前に到り

云是孟武昌 云ふ是れ孟武昌

令獻苦雪篇 苦雪の篇を獻ぜしむと

長吟未及終 長吟して未だ終ふるに及ばざるに

不覺爲悽然 覺えずして悽然爲り

古之賢達者 古の賢達の者

與世竟何異 世と竟に何か異なる

不能救時患 時の患ひを救ふ能はずんば

諷諭以全意 諷諭して以て意を全うす

知公惜春物 知る 公の春物を惜しむは

豈非愛時和 豈に時の和するを愛するに非ざらんや

知公苦陰雪

傷彼災患多

姦兇正驅馳

不合問君子

林鷲與野獸

無乃怨於此

兵與向九歲

稼穡誰能憂

何時不發卒

何日不殺牛

耕者日已少

耕牛日已希

皇天復何忍

更又恐斃之

知る 公の陰雪を苦とするは

彼の災患の多きを傷めばなり

姦兇の正に驅馳すること

合に君子に問ふべからず

林鷲と野獸とは

乃ち此を怨むこと無からんや

兵興りて九歳に向んとし

稼穡誰か能く憂へん

何れの時か卒を發せざる

何れの日か牛を殺さざる

耕す者は日に日に少く

耕牛は日に日に希なり

皇天復た何ぞ忍びんや

更に又た之を斃せんことを恐る

この作品の「姦兇正驅馳、不合問君子、林鷲與野獸、無乃怨於此。」という句は、孟士源の作の、

林鷲却不語

野獸翻有蹤

林鷲は却て語らず

野獸は翻りて蹤有り

という句をふまえて、それを解釋したものである。元結によれば、この二句は、安史の亂後各地に凶悪な者たちが跋扈し、民が辛酸をな

めていることを表しているという。そして彼はさらに進めて、相次ぐ徴兵によって地方が荒廢していることを厳しい批判の語調とともに指

摘している。元結は孟士源の詩を諷諭の意識に基づく作品と解釋し、自らの見解を付しているのである。

これらの作品には元結の諷諭への志向がよく表れている。

元結は自らの理念に基づいて世俗を教化しようとする強い意識を持っていた。このことをよく物語る資料に「文編」がある。

「文編」は、大曆三年（七六七）、道州刺史の任にあった晩年の元結が、自らの近作を集め、舊編に合し、二百三編を十巻にまとめたものである。その序は「文編」をまとめるに至った経緯を自ら回顧しつつ述べたもので、道州刺史の任にあった頃の彼の心境がよく窺われる資料でもある。

天寶十二年、漫叟以進士獲薦、名在禮部。會有司考校舊文、作文編納於有司。當時叟方年少、在顯名跡、切耻時人諂邪以取進、森亂以致身。徑欲填陷於方正之路、推時人於禮讓之庭、不能得之。故優游於林壑、快恨於當世。是以所爲之文、可戒可勸、可安可順。……其意必欲勸之忠孝、誘以仁惠、急於公直、守其節分。如此非救時勸俗之所須者歟。……

（天寶十二年、漫叟進士を以て薦めらるるを獲、名は禮部に在り。會有司舊文を考校せしかば、文編を作りて有司に納む。當時叟は方に年少く、名跡を顯はすに在りては、切に時人の諂邪して以て進むを取り、森亂して以て身を致すを耻づ。徑ちに陷弊を方正の路に填め、時人を禮讓の庭に推さんと欲するも、之を得る能はず。故に林壑に優游して、當世を快恨す。是を以て爲す所の文は、戒むべく勸むべく、安んずべく順ふべし。……其の意は必ず之に忠孝を勸め、誘ふに仁惠を以てし、公直に急に、其の節分を守らんと欲す。此の如きは時を救ひ俗に勸むるの須ふる所の者に

非ざるか。……)

この序によれば、進士に擧げられた頃の元結の目に映じたのは、讒言や陷弊などよこしまな手段によって榮達を得るのに汲々としている當代の人士たちの姿であった。元結は彼等に對して方正禮讓の道をもつて臨んだのであるが、それは受け入れられなかった。そこでゆつたりと山林に身を置き、そうした時世を憂い、また残念に思ったのである。山林に身を置いたとは、商餘山に靜養していたことをさす。この序において元結は、商餘山に靜養していた頃に作られた詩文はいづれも世俗を方正禮讓の道に導こうとする意圖のもとに書かれ、またそれ以後に書かれたものもやはり世俗に忠孝、仁惠、公直、節分を教えんとするものであり、時俗を教化しようとする意圖に基づいていた、と述べている。

こうした意識のもとに制作された文學が、いわゆる載道の文學であり、諷諭の文學であった。「說楚何荒王賦」「說楚何惑王賦」「說楚何惛王賦」「引極」「演興」などはその典型として位置付けられるであろう。

先の「酬孟武昌苦雪」が制作されたのは、廣徳元年（七六三）である。元結はその翌年の廣徳二年（七六四）、道州刺史として赴任し、五月二十二日に道州に到着している。そこで彼は悲惨な道州の民の状況を目にし、まもなく「春陵行」を制作した。この詩は道州の民の言語に絶する悲惨な姿という現實に觸れて作られたものであったが、基底においてはこれまで述べてきた諷諭の意識によるものであった。しかしこの作品を特徴づけているのは、

大郷無十家 大郷に十家無く

大族命單羸

大族も命單羸なり

朝淪是草根

朝淪は是れ草根

暮食是木皮

暮食は是れ木皮

出言氣欲絶

言を出だせば氣絶えんと欲し

言速行歩遲

言速かなるも行歩遅し

安人天子命

人を安んずるは天子の命なり

符節我所持

符節は我の持つ所なり

州縣忽亂亡

州縣忽ち亂亡すれば

得罪復是誰

罪を得るは復た是れ誰ぞ

逋緩違詔令

逋緩して詔令に違ふ

蒙責固所宜

責を蒙るは固より宜しき所

前賢重守分

前賢は分を守るを重んず

惡以禍福移

悪くんぞ禍福を以て移らんや

亦云貴守官

亦た云に官を守るを貴ぶ

不愛能適時

能く時に適ふを愛せず

と、道州の黎民の困苦の状況を比興の手法を探ることなく描き、官吏としての自らの理念と現實との矛盾による苦惱をあからさまに賦していることである。

また、この直後に作られた「賊退示官吏」においては、盜賊も道州の民を憐れんで略奪をしなかったのに比して、官吏が厳しい租税の徴收を行い、民を死にいたらしめんとしていることと述べ、やはり比興の表現を用いずに激しい直截的な言辭で當代の政治を批判している。

この「春陵行」と「賊退示官吏」が中央に對してどのような影響を

與えたかは明らかではないが、それが恐らくは朝廷の忌避に觸れたであらう事は、「別何員外」という作品に窺われる。

誰能守清濁

誰か能く清濁を守らん

誰能嗣世儒

誰か能く世儒を嗣がん

吾見何君饒

吾 何君饒を見るに

爲人有是夫

人と爲り是れ有るかな

黜官二十年

官を黜けらるること二十年

未曾暫崎嶇

未だ曾て暫くも崎嶇たらず

終不病貧賤

終に貧賤を病まず

寥寥無所拘

寥寥として拘む所無し

忽然逢知己

忽然として知己に逢ひ

數月領官符

數月にして官符を領す

猶是尙書郎

猶ほ是れ尙書郎

收賦來江湖

賦を收めんとして江湖に來る

人皆悉蒼生

人皆蒼生を悉し

隨意極所須

意に隨ひて須る所を極む

比盜無兵甲

盜に比ぶれば兵甲無く

似偷又不如

偷に似て又た如かず

公能獨寬大

公能く獨り寛大にして

使之力自輸

之をして力めて自ら輸せしむ

吾欲探時諺

吾時諺を探りて

爲公伏奏書

公の爲に伏して書を奏せんと欲す

但恐抵忌諱

但だ恐る 忌諱に抵るるを

未知肯聽無

未だ聽くを肯んずるか無かを知らず

不然且相送

然せずして且く相送り

醉歡於坐隅 坐隅に醉歡せん

この作品は何君饒（何昌裕）に與えたものである。元結には他に「與何員外書」があり、その原注に「永泰中、何昌裕爲戸部員外。（永泰中、何昌裕戸部員外と爲る）」とあるのによれば、制作時期は「春陵行」を書いた翌年の永泰元年（七六五）以後と考えられる。

元結はまず何君饒の人柄を稱え、彼が收税のために至ったことを述べる。ついで「人皆悉蒼生、隨意極所須。比盜無兵甲、似偷又不如。」と、他の官吏たちが自らの必要を満たすために人民を苦しめている様子を盜賊の行爲に比較しつつ述べている。この表現は、「賊退示官吏」に、

今來典斯郡

山夷又紛然

城小賊不屠

人貧傷可憐

是以陷鄰境

此州獨見全

使臣將王命

豈不如賊焉

今彼徵斂者

迫之如火煎

誰能絕人命

以作時世賢

.....

とあるのに全く等しい。元結は、「別何員外」において、何君饒を

今來 斯の郡を典る

山夷又た紛然たり

城小にして賊屠らず

人貧にして傷みて憐むべし

是を以て鄰境を陷るるも

此の州は獨り全くせらる

使臣は王命を將ふ

豈に賊に如かざらんや

今彼の徵斂の者

之に迫ること火の煎するが如し

誰か能く人命を絶ち

以て時世の賢と作らんや

.....

頌讚する時諺を採集してそれを奏上することが忌避に觸れるかも知れないと言う。忌避に觸れるかもしれないのは、おそらく「時諺」の中に必ずや言及されているであろう、官吏を盜賊に比するという言辭であったであろう。このことはまた「春陵行」よりはむしろその言辭を含んだ「賊退示官吏」のほうが朝廷の忌避に觸れた可能性が高かったであろうことを物語っている。

詩は、何君饒を頌讚する言辭を奏上することをひとまず止め、座隅で酔うことにしようとは結ばれる。座の隅で歡酔しようという元結の心中には、何君饒を頌讚する言辭を奏上することができないということにとどまらず、少なくとも自身の文學の營みにおいて諷諭の意識を發露することができないという鬱屈した思いが蓄積されていたことであろう。だが、彼は己が文學の理念、載道としての文學を放棄したわけではなかった。直接的な言辭を採ることはなかったが、この後も「題孟中丞閣」「朝陽岩銘」「窳樽銘」「七泉銘」「寒泉銘」など、水石を主な對象として諷諭の意識に基づいた作品が比興の手法によりながら制作されていく。

『文心雕龍』銘箴篇に「銘者、名也。觀器必名焉。正名審用、貴乎慎徳。（銘とは名づけるという意味である。器物を見ると必ずそれに名づけるが、それは實體にふさわしい名稱をつけることによって器物の作用を明らかにし、使用者自身が徳を慎む助けとするということを貴んだのである。）とあるのによれば、銘とは對象の價値を顯彰し、それを己が鑑戒とするものである。元結の水石や亭臺に關する銘のあるものにはその對象の價値を世に對して顯彰し、それによって世俗を教化しようとする意識が顯著に現れている。先の「七泉銘」のうち「漚泉銘」「沔泉銘」「泔泉銘」「淳泉銘」などは、その例である。いま

「涑泉銘」を擧げる。

不爲人臣 人臣と爲らざれば

老死山谷 山谷に老死せん

臣於人者 人に臣たる者は

不就汚辱 汚辱に就かざれ

我命涑泉 我涑泉と命づくるは

勸人事君 人に勸めて君に事へしむるなり

來漱泉流 來りて泉流に漱ぎ

願爲忠臣 願はくは忠臣と爲らんことを

顏眞卿をして「君雅好山水、聞有勝絕、未嘗不枉路登覽而銘贊之。

(君雅より山水を好み、勝絶有りと聞けば、未だ嘗て路を枉げ登覽して之を銘贊せずんばならず。)」と言わしめた程の、怪異な水石に對する元結の志向は、前節で指摘したように、水石の中に自らと等しいものを見出したことと、そこに生じる別乾坤への注視とにおいて成立している。彼はそれら自ら見出した水石に限りない愛着を抱き、命名という行爲を通して讚美し、世人に對する規諫としようとする。こうした意識がすなわち元結における諷諭の意識に他ならない。「涑泉銘」について言えば、彼が目にしたのは、世に忘れられた無名の泉流であり、泉源は世人の價値觀に合致しない怪異な形狀をしていた。その人爲を施さない怪異な形狀は彼を魅了し、彼は限りない愛着を抱きつつ、涑泉という名稱を與えて讚美し、世人に對する規諫としようとしているのである。記や銘はのために相應しい表現形式であった。

一方、元結の文學には、「引東泉作」「石魚湖上作」など、諷諭といふよりはむしろ怪異な水石ともにある喜びを歌う作品がある。

「石魚湖上作」を擧げる。

吾愛石魚湖

石魚在湖裏

魚背有酒樽

繞魚是湖水

兒童作小舫

載酒勝一杯

座中令酒舫

空去復滿來

湖岸多飲石

石下流寒泉

醉中一盃漱

快意無比焉

金玉吾不須

軒冕吾不愛

且欲坐湖畔

石魚長相對

吾は愛す 石魚湖

石魚 湖の裏に在り

魚の背に酒樽有り

魚を繞るは是れ湖水

兒童小舫を作り

酒を載すること一杯に勝ふ

座中 酒舫に令し

空にして去り復た滿たして來る

湖岸に飲石多く

石下に寒泉流る

醉中 一たび盃漱すれば

快意は焉に比する無し

金玉 吾は須るず

軒冕 吾は愛せず

且く湖畔に坐して

石魚と長へに相對せんと欲す

(石魚湖上作)

湖中に魚の形をした怪異な岩石があり、その背に窪んだ所があり、そこに酒を滿たしておく。元結らは湖畔に座し、石魚の背から酒を運ばせては、飲んで酔う。石の下を流れる冷たい泉流で手を洗ひ口を漱ぐ。これに比較できる快さはない。富も身分も願わない、唯だ湖畔に座して石魚と向かいあつていただけである、というこの詩は、石魚に對する贊歌である。石魚は元結に命名されることで彼自身のものとなり、ひたすらな賞玩の對象にまで高められている。ここにはまた確かに、「金玉吾不須、軒冕吾不愛。且欲坐湖畔、石魚長相對。」という

表現によって、元結の世俗に對する悲しみと憤り、そして己が不遇感が逆説的に反映されている。同じ時期に書かれた「石魚湖上醉歌」には、

我持長瓢坐巴丘 我長瓢をもちて巴丘に坐し

酌飲四坐以散愁 四坐と酌飲して以て愁ひを散ぜん

と、石魚湖上に酔醉する行爲が、胸中の愁いを解消しようとするためのものであることを述べている。劉大杰氏が「他的《右溪記》一類的山水小品、也寄寓着作者的悲憤。」と述べる所以である。

しかし、「散愁」という言葉に注目すると、「石魚湖上作」においても、むしろ自己の不遇な思いや社會への悲憤が怪異な石魚とともにあることの中で癒されている、ということに表出の中心があると考えられる。自らが見出だし、命名して自らのものとし、その怪異さ故に限らない賞玩の對象にまで高められた水石のたまたまいともにあることの喜びが、元結の晩年の文學を特徴づけているのである。

晩年に多く制作された記録の類においても、怪異な水石を顯彰し時俗を諷諫するという行爲を通して元結の不遇感と悲憤とが癒されているのであろう。

おわりに

これまでことに怪異な水石に對する志向を中心にして元結の文學を概観してきたが、彼は怪異な水石に對して強い愛着を抱き、ことに洞や穴、凹状の岩石についてはそこに生ずる別乾坤に注目していた。それらの世間から見捨てられた怪異な水石は元結の社會に對する關係と等しいものを持ち、命名を通して元結自らのものと意識され、愛玩の

對象にまで高められていた。

廣徳二年（七六四）に書かれた「春陵行」「賊退示官吏」の二編の詩は、道州の民の困苦と官吏としての自らの意識をあからさまに述べた作品であったが、「賊退示官吏」の中に示されている官吏を盜賊に比する表現が朝廷の忌避に觸れた可能性が高く、この年以後の作品には社會に對する悲憤が水石のたまたまいに託されて表出されるようになる。李商隱の言う「危苦激切」とは、このことを指しているのである。

元結は廣徳二年以後も、諷諭としての自らの文學の在り方を放棄したわけではなく、諷諭の意識に基づいた作品を多く残している。

しかし晩年の元結の文學を特徴づけているのは、怪異な水石を見出だし、それに命名して自らのものとして愛玩し、あるいは諷諫の意を託すという行爲を通して、彼の悲憤が癒されていたということである。「石魚湖上作」は、怪異な水石とともにあることで、自らの悲憤が癒され、心が喜びに満たされていくことを詠じたものと解釋される。

元結のこのような意識は、水石に對してばかりではなく、例えば『篋中集』編纂といった行爲の中にも見出だすことができる。

『篋中集』は、沈千運ら七人の詩二十二首を集めたものである。その序において「近世作者、更相沿襲、拘限聲病、喜尙形似、且以流易爲辭、不知喪於雅正。（近世の作者は、更々相沿襲し、聲病に拘限し、形似を喜尙し、且つ流易を以て辭と爲し、雅正を喪ふを知らず。）」と言い、當代の文學が元結の主張する風雅の文學に合致しないことが述べられ、續いて沈千運の文學について「吳興沈千運、獨挺於流俗之中、強擧於已溺之後。窮老不惑、五十餘年。凡所爲文、皆與時異。

(吳與の沈千運は、獨り流俗の中より挺んで、強く已溺の後に攘ふ。窮者するも惑はざること、五十餘年。凡そ爲る所の文は、皆時と異なる。)と言ひ、沈千運の文學が時俗とは異なつていたことを指摘する。さらに「故朋友後生、稍見師效、能似類者有五六人。於戲、自沈公及二三子、皆以正直而無祿位、皆以忠信而久貧賤、皆以仁讓而至喪亡。(故に朋友後生に、稍く師效せられ、能く似類する者に五六人有り。於戲、沈公より二三子に及ぶ、皆正直を以てして祿位無く、皆忠信を以てして貧賤たること久しく、皆仁讓を以てして喪亡に至れり。)」と、沈千運らが官吏としての優れた資質を有しながら、世に認められず埋もれていったことを述べる。彼らの姿は、怪異なるが故に世に認められぬまま忘れられている水石のイメージに等しい。そして「且欲傳之親故。冀其不忘於今。(且に之を親故に傳へんと欲す。冀はくは其れ今に忘れざらんことを)」と、彼らの詩文を世に顯彰して正しい文學の姿を示そうとすることは、水石に命名して世の規諫としようとする意識と同一のものである。

また、例えば同時代の『國秀集』『珠英學士集』などに匹敵しうるような、その文學を顯彰するのにふさわしい名稱があつたであらうに、そうした名稱を探らず『篋中集』と命名したことに、この小集を文箱に納めて自らのものとして愛惜しようとする意識が窺われる。沈千運らの文學はまた元結の文學であつた。この『篋中集』の編纂という行爲を通して、元結の心は癒されていたことであらう。

法(1) 劉大杰『中國文學發展史』(上海古籍出版社、一九八二年 四八三ページ)

(2) 孫望『元次山年譜』(古典文學出版社 一九五七年)

(3) 例えば、市川桃子「元結『春陵行』考」、『東方學』六〇集 一九八〇年

(4) 『歴史地理』八六一—昭和三〇年所載

(5) 太田晶二郎氏は「海陽泉帖考」において、この作品が元結のものであることを論證しておられる。

(6) 市川桃子氏、前掲論文。

(7) 市川桃子氏の前掲論文に指摘がある。

(8) 劉法綏「讀元結作品小識」、『文學遺產』一九八一年三期

(9) 聶文郁「元結詩解」(陝西人民出版社 一九八四年 一四九ページ)

(10) 孫望『元次山集』「前言」、聶文郁「元結詩解」(寫在前面)、李建崑「元結詩試論」(『文史學報』一六 一九八六年)など。

(11) 『全唐詩』卷一九六 所載

(12) 市川桃子「元結社會詩考」(『東大文哲學會報』二 一九七六年)及び同氏「元結『春陵行』考」。市川氏は、これらの論文において「春陵行」の位置付けについて詳細に論じておられる。

(13) 劉大杰『中國文學發展史』(上海人民出版社、一九七六年 第二冊 二二八ページ)